（５）特別支援教育研究会（通常学級）

会　長　小野川　真紀（東中筋小）
副会長　村上　真紀　（東山小）
事務局　武内　祥　　（東中筋小）

１．研究主題「一人ひとりに応じた支援を通して、子どもたちが生き生きと学べる授業づくり」

２．研究経過

実施年月日	研究のあらまし	会場	備考
令和５年 ５月９日（火）	四万十市教育研究会　組織総会 内容：役員選出、研究主題設定、年間計画	市立中村中学校	
８月４日（金）	四万十市教育研究会　夏季研修会 内容：講演・事例検討・グループ協議 講師：奥宮　智子指導主事（西部教育事務所）	中村小学校	２１名参加

３．夏季研修会

今年度の夏季研修会では、西部教育事務所　奥宮智子指導主事をお招きして、「通常学級における特別な支援が必要な児童生徒への支援や手立て」についてご講演をいただいた。発達障害等がある児童を理解する上で大切なことは「子どもの視点で考える」ことであり、「やらないのではなく、できない」のではないかといった「困った子どもから困っている子ども」への視点の転換について教えていただいた。

また、特性とそれに応じた具体的な支援方法について教えていただき、子ども自身ができていることやできていないこと（困難さ）を自覚し、子どもから伝えることができるようにしていくことも支援であることを学ぶことができた。

事例検討では対応策を協議し、グループ協議では日頃困っていることを共有した。その後、奥宮指導主事にご助言をいただいた。

【講演の感想】

・子どもの特性を理解して過ごしづらさを見つけ、どうしたら困り感がなくなるのか考えていきたいと思った。具体的な方法を教えていただいたので実践したいと思う。色々な活動をするときに子どもがやらないと判断する前に「できない理由は何か」を考え、子どもに寄り添って解決策を見つけたいと思った。
・対応の仕方も具体的に学ぶことができて、自分の学級の子どもを思い浮かべながら話を聞くことができ参考になった。
・１学期の様子を思い浮かべながら、もう一度、個別の指導計画を見直したいと思った。
・児童理解のポイント（子どもの視点で考えること）を大事にしながら、児童一人ひとりにあった支援をしていきたいと思った。また、発達障害の子どもだけでなくすべての子どもにあると有効な支援「ユニバーサルデザインに基づく授業づくり」について学んだことを２学期から実践してきたい。指示をするとき、学習するとき、色々な場面で児童の視点で考え、動いていきたいと思った。

・生徒の困り感を聴いたり観察したりしながら、まず実態を把握していくことが大切だと感じた。子どもの困り感や困難さをしっかり見取って支援方法を考えていきたいと思った。
・子ども自身が困難さを自覚し、子どもから解決方法を提案させることも大事ということを初めて知った。つい注意になりがちなので「～してくれると嬉しいな」など期待される行動をＩメッセージで伝えていきたいと思った。
・発達障害の特性やその子の困り感について再度考えることができた。

【グループ協議の感想】
・日々の困り感について共有したことでいつも困っていたことへの解決策が見えたので、2 学期に実践したい。子どもの背景を理解しようと努力して、まずは子どもに寄り添うことをしたいと思った。
・他の先生方からアドバイスを聞くことができてとてもよかった。
・自分が困っていることを出し、どんな手立てをしていくといいか、いろんなアドバイスをもらうことができた。
・通常学級の中にも困り感をもった生徒がいるので一人一人に支援が届くようになると学びに広がりが出てくると思った。2 学期からの実践につなげ、校内にも広げていきたい。
・指導と支援のバランスを大切にして、子どもと関わっていきたい。
・日頃聞くことができない中学校の現状を知ることができてよかった。
・小学校の先生方の協議の発表を聞き、支援が必要な生徒は、小学校の 6 年間に様々な支援を受けていると感じた。中学校は、小学校での支援方法を知り、進路実現に向けてより生徒自身が主体的に学習できるようにしていきたい。

４．今年度の成果と課題

〇成果

・夏季研修会の講演で教えていただいた具体的な支援策及び事例検討・グループ協議での実践共有で、声がけ等の支援や指導方法について新たな学びを得ることができた。また、参加教員の困り感の軽減にもつながり、2 学期以降の教育実践に活かすことができた。

●課題

・特になし